

食品嗜好の適応性に関する研究

(第2報)

長野県立保育専門学院 小松 卓郎
諏訪市豊田診療所 矢島 千代

食品嗜好は日常保育の立場から極めて重要な問題でありながら、その成り立ちが身体内外の、あらゆる複雑な要因を含み、単一固定化された概念からは捕捉し難い、動的な流れを持つ為、かえって等閑視か、逃避とまではいかないまでも、安易な常識の上に棚上げされている憾みがない、とは言い得ない実情であった。われわれは、この問題の基礎的研究の一環としての適応性の問題をとりあげ、小坂動態的体質学をこの方面に応用し、一般的傾向調査と共に体質生理的に、S E型の園児はより動物性の食品系に、W M型の園児はより植物性の食品系に、M型はその中間に、と食品の嗜好性が方向づけられる業績を報告し、この方向に反した食品嗜好の矯正が、園や家庭において、好ましからざる身心の障害を園児にもたらしている事実をさきに報告したが、今回は更に食品温度の領域を質問紙法及び面接法等によって調査した。(調査項目二三五項目)

(1) 食品温度と嗜好傾向 耐暑非耐寒性(寒冷刺激に弱い)のS E型と、耐寒非耐暑性(寒冷刺激に強い)のW M型とが、冷めたい飲食品に対して、どのような態度をとるかは、この表からも窺知し得よう。更に注目されるのは、年少程、熱い飲食品が嫌いであり、温度に神経質の者が五〇%に及んでいる事である。

園児は一般に冷たい飲食品が好き(六三・五%)である。が、量

第1表 食品の温度と嗜好性

1. 調査対象 (222名 (SE型 33名, M型 113名, WM型 76名)
男 109名 女 113名)
2. (%)は対同体質者比 (回答不備の例数は除外)

分類別 調査項目	体質類型別			組 別			性 別		計
	S E型	M 型	WM型	年 長	年 中	年 少	男	女	
熱い飲食品が嫌いの者	15 (45.5)	53 (46.9)	37 (48.7)	25 (32.8)	33 (45.7)	47 (61.7)	49 (44.8)	56 (49.7)	105 (47.3)
冷めたい飲食品が嫌いの者	4 (12.1)	2 (1.8)	4 (5.3)	4 (5.2)	5 (7.1)	1 (1.3)	3 (4.6)	7 (6.1)	10 (4.5)
飲食品の温度に神経質の者	21 (63.6)	52 (46.0)	30 (39.5)	32 (42.1)	33 (45.7)	38 (50.0)	54 (49.5)	50 (44.2)	104 (46.8)
熱いと多量は食べない者	18 (54.5)	49 (43.4)	30 (39.5)	31 (40.7)	30 (42.8)	36 (47.3)	51 (46.7)	45 (39.8)	96 (43.2)
冷めたいと多量は食べない者	11 (33.3)	19 (16.8)	11 (14.5)	22 (28.9)	10 (14.2)	9 (11.8)	23 (20.9)	18 (15.9)	41 (18.5)

の問題になると、熱い飲食品に対する場合とは、その趣きを異にしている。

(2) 食品の温度と身体障害 S E型の六三・六%は冷めたい飲食品で、腹痛、下痢、嘔吐等の胃腸疾患を経験している。その他の項目にもみられるような体質差は、給食や栄養指導の際に考慮されるべき、幾多の示唆を含む事であろう。またその他の調査と照合すると、男児よりも女児の方に、食品温度に対する耐容性が強い成績の一端を示している。

それと共に、冷めたい飲食品に対して、園児が一体どの程度の身体障害——胃腸障害を来たしているのか、その程度も示されている。

